平成患者学　シンポジウム――誇りある生と

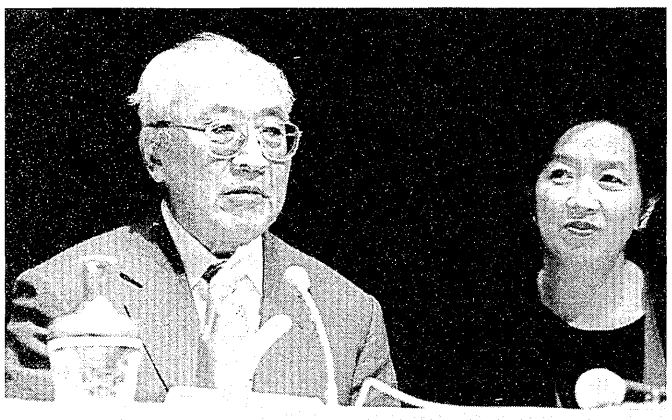
患者の意向、尊重する医療へ

2度の発作、記憶障害とも闘う

自分でできることはする

加藤一郎さん

かとう・いちろう　成城学園名誉学園長。紛争当時の東大学長代行をへて1969年学長に。日本医師会生命倫理懇談会の座長として「説明と同意」などの報告書をまとめた。



長女の小宮山洋子さんとともに出席した加藤一郎さん

六年前に脳出血を起こし、座ることもできなくなりました。「ゴルフもやりたい」と言ったら「それもできるかもしれない」と励まされ、一生懸命に半年ばかりリハビリをしたら、かなり元に戻りました。

そうしたら、昨年秋、今度は脳こうそくが起こったのです。記憶に残っている部分と残っていない部分が、自分でもはっきりしない不安定な状態です。

世の中のためになることはしたいという自分の意志と、お医者様、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）の方々の助けで、できることはやっていこうと思いました。

イギリスでは一度倒れたことも思い起こして、それを活用する。できないこともできるようにしていこうと工夫がされているわけです。じゃあ、自分もできることは伸ばしていきたいと努力しているわけです。

インフォームド・コンセントという言葉をお聞きかと思います。内容をよく知らされたうえで同意することです。

アメリカの大統領委員会の報告書にインフォームド・コンセントのことがありまして、「医療は医師と患者の共同作業」とうたわれています。今までは医師の言うとおりになっていた、これからは患者の意向も尊重する、両者が一致したところに新しい医療ができていく、という考え方。私も賛成です。

医療を受けるとき、自宅か病院かということがまず問題になります。生活の質を重んじると、自宅にいながら人の手助けも借りて医療ができる、という選択肢が考えられます。病院か自宅か、ではなくて、その中間ですね。

必要があれば病院へ行く。あるいは医師の往診や訪問看護を受け、家族が用がある場合は、ショートステイとかデイケアということで、よそへ行って面倒を見てもらう…。家族を拘束しないことが大事です。

日本では、いままでは、記憶障害が起これば仕方ないといわれました。しかしこれからの高齢社会になると、記憶障害を克服して生きがいのある人生を生きることが大事です。

障害者手帳は幅広く生活全体をカバーするものに改め、生活全体を助けることが今後の医療の進む方向ではないかと思われます。

加藤さんの長女でNHK解説委員の小宮山洋子さんの話

昨年倒れたときは、最近の記憶がほとんどなくなって、再起は難しいだろうと家族も思いました。

しかし、イギリスでは、記憶できない分、なんでも記録をして、それをつなげることで活動するという方法があるのを知り、周りもそれを助けてきました。

日本では、記憶障害の方の家族がどう対処し、どう治療したらいいのか、がほとんど見つからないのが現状です。そういうことの研究体制や人材育成が進むといいなと思います。

発言を聞いて

体験語る勇気に敬意

コーディネーター　大熊由紀子

加藤一郎さんがシンポジウムへの出席を承諾してくださったのは昨年夏のことでした。

六年前の体験から見えてきたことを話してくださるはずでした。

ところが思いがけない事態が起こりました。九月、こんどは脳こうそくによる記憶障害が加藤さんを襲ったのです。蓄積されている知識に変わりはありません。私の顔も覚えていてくださいました。新しい出来事の記憶が問題でした。

たとえば、かぎ、時計、眼鏡といった身近な品を机に並べ、それをしまって、「ここに何があったでしょう」と尋ねる記憶力のテスト法だと、零点でした。

シンポジウム出席をあきらめかけた時、思いがけない知らせに接しました。

関心のない分野を題材にしたテストだときっぱり思い出せない加藤さんが、法律や社会問題など興味のある分野だと記憶できる、とわかったのです。

数字の記憶もすばらしく、3527……といった無意味な数字でも九けたまで覚えられ、七けたの数字でも、スラスラと逆から言えるのだそうです。

「草稿を作って読むのなら、出席可能かもしれません」という主治医の言葉に勇気をえて、ご登場いただくことになりました。

ところが、またまた難問が持ち上がりました。念のため四日前にリハーサルしたところ、自内障が悪化して原稿が読めないのです。

長女の洋子さんが、直径四ミリほどの大きな字で話の柱のメモを作ることを思いついてくださいました。

十五分のミニ講演はこうして無事終わり、会場は深い感動に包まれました。

ほんの二十年ほど前の日本では、車いす姿を街で見かけることはまれでした。家や施設に引きこもっていたからです。テレビも顔が分からないように、後ろ姿を映すほどでした。

それが変わりつつあります。けれど、記憶障害のある人たちについては家族が隠す状況が続いています。高名な方ほどそうです。

その呪縛（じゅばく）を断ち切ったご家族と、「それが世の中のためになるのなら」と自らの記憶障害の体験を語してくださった加藤さんに、敬意を表したいと思います。

深刻ぶらない態度　患者の心をほぐす

梁　勝則さん

私は、検査の好きな病院の内科医でした。あるとき、奥さん馬乗り事件というのがありました。「個室で男性の患者に奥さんが馬乗りになっているので何とかしてくれ」と言われて見に行ったんです。実は、男性はすい臓がんの痛みに苦しんでいたのです。自分ががんになったときには大変だなと思いました。

本当の病名を告げられず、痛みの治療は放置される。最期まで真実を知らずに天井を見ながら亡くなってしまう。そういうのが日本の医療の現実だったのです。

開業した今、在宅ケアの一部にがんなどのホスピスケア、ターミナルケアがあると思っています。

私たちのモットーは「患者心と秋の空」。つまり、患者は心変わりするものだが、しかったりしないで、ゆっくりついて行こうよ、ということです。

一人の患者さんの例を紹介します。大腸がんの末期で退院した人。本人はがんとは知らないのに、自分はいよいよかなと思って家に帰ったのです。

あるとき、ひどい痛みが起きまして、私が往診に行ったけど、あわて者で注射のモルヒネを忘れてしまいました。で「注射、忘れました」と言ったら、「足をもめ」。もんでいたら顔色がよくなって、ニヤッと笑って「先生、いい服を着てるね」とほめたんです。

私たちが考えているのは、あまり深刻にやらないでおこう、ということです。ホスピスケアは、こちらもずごいストレスがあるからです。私たちは「白衣の宅配便」と呼んでいますが、軽い気持ちでお付き合いしようと思っています。

そして、これからの医療はケアが中心になる。ナースにケアマネジャーとしての役目が期待されていると思っています。

リャン・スンテ　九二年、神戸市長田区に診療所を開設。日本ホスピス・在宅ケア研究会をつくり、事務局長。阪神大震災の仮設住宅支援もしている。

薬害エイズ問題は怒りを持って追及

櫻井よしこさん

私が薬害エイズに目覚めたのは、ある少年に出会ったときでした。長野県出身で、（エイズウイルス＝HIV＝感染で）東大医科学研究所付属病院に入院していました。目がクリクリとして、かわいらしい顔の坊やだったんですが、手も足もとても小さいんですね。「おいくつ」と聞いたら「十二歳」と言ったのでびっくりしました。

彼の体にはたくさんの管がつながれていました。痛み止め、栄養剤、そして全身をむしばんでいるがんに対する薬、管で薬を入れてそれらをようやく抑えている状況だったのです。

彼は知り合ってから八カ月でいなくなりました。赤ちゃんの時から血液製剤を打たれていました。「必要だ」と言われた薬で、エイズウイルスに侵されていたのです。

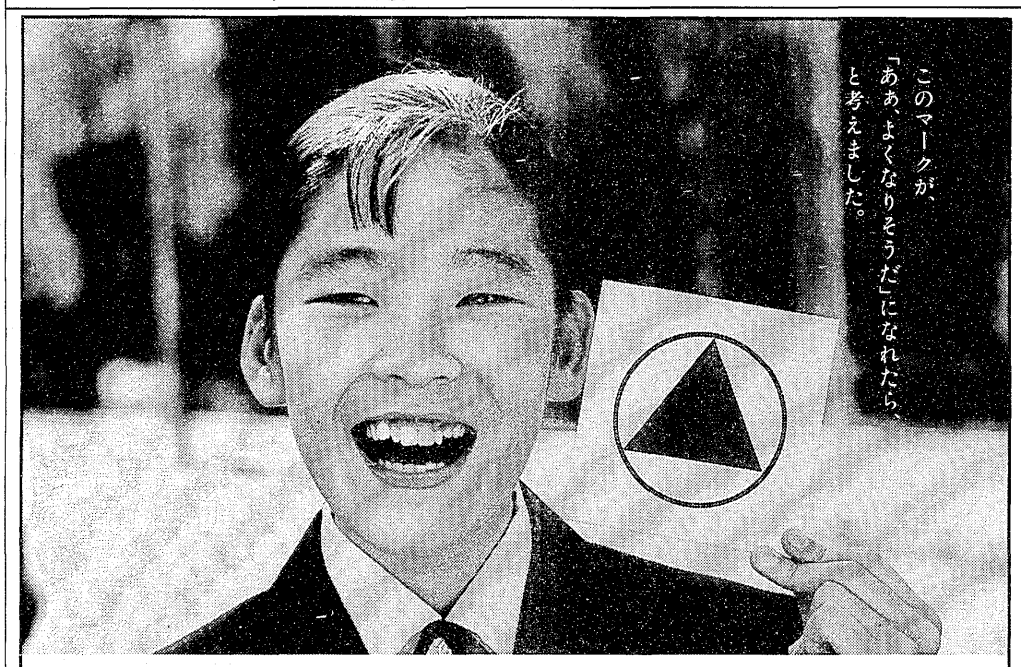
地方では、患者さんや家族の方がとても名乗り出ることができないような状況に置かれています。HIV感染に対して、医療もなされず、彼の体はどんどん悪くなっていった。

日本で前向きにHIVの医療をしている病院は、厚生省が、恒久的な医療センターとして位置づけているのではなく、お医者さんの個人的な努力によっているのです。

厚生省はHIVに汚染された血液製剤を危険だと知っていながら日本の患者に使い続けることを許したことで、一度目の「見殺し行為」をしたと私は思っております。二度目は、十三年間、エイズに対する抜本的な医療体制確立になんの力も尽くしてこなかったことだと感じています。

怒るべきときには怒らなければならない。絶対にタイミングを逃さないように声を上げなければならない。これからも怒って追及しようと思っています。これが私の目覚めの結果です。

さくらい・よしこ　ベトナム生まれ。ニュースキャスター。著書『エイズ犯罪　血友病患者の悲劇』で昨年、大宅壮一ノンフィクション賞を受けた。

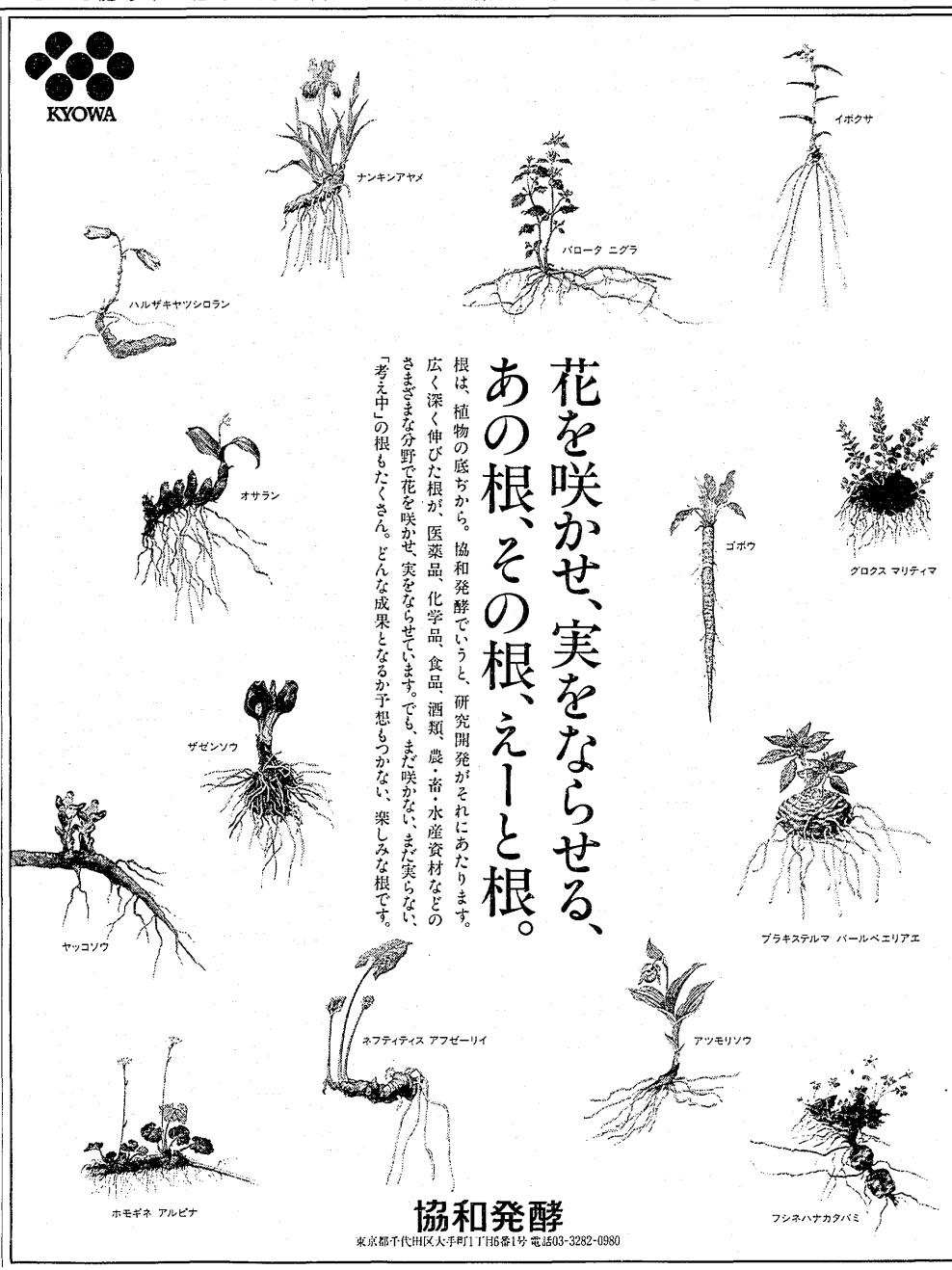


幼いころ、頭が痛む時に、お母さんが優しい気持ちを込めて掌をあててくれると、なんだかホッとして、なおってしまったコトってありましたね。これ、医薬品メーカーである私たちにも、とても重要なテーマじゃないか、とタケダは思うのです。私たちのつくる医薬品には、「▲」のマークが刻まれています。気の遠くなるような時間と、幾多の実験を経て、ひとつの新薬が完成に近づく。そして、それが人の健康のためにお役に立てると判断できたときにはじめて、自信を持って押されるマークなのです。私たちはいま、高齢化社会に向けてガン、高血圧症、糖尿病などの、さらに増加が予測される病気の克服に全力で取り組んでいます。そこから生み出された「▲」のマークを見て、ひとりでも多くの人々に「あぁ、よくなりそうだ」と思っていただければ。タケダは、そんなクスリをつくりたい、と考えています。

あなたの
笑顔につながる
マークで
ありたい。

▲武田薬品工業株式会社

KYOWA



花を咲かせ、実をならせる、
あの根、その根、えーと根。

根は、植物の底ぢから。協和発酵でいうと、研究開発がそれにあたります。広く深く伸びた根が、医薬品、化学品、食品、酒類、農・畜・水産資材などのさまざまな分野で花を咲かせ、実をならせています。でも、まだ咲かない、まだ実らない、「考え中」の根もたくさん。どんな成果となるか予想もつかない、楽しみな根です。

協和発酵
東京都千代田区大手町1丁目6番1号 電話03-3282-0980